

フエ地域研究の発想・枠組み

フエ旧外港集落フオンヴィン社と周辺域における
多分野フィールド研究から

西村昌也

Concept and Framework of Hue Area Studies

Multidisciplinary research on the old port town in Huong Vinh Commune
and its surrounding area

NISHIMURA Masanari

キーワード：地域研究、阮朝、都城地域、フオンヴィン社

1. はじめに

関西大学では、2008年度より、グローバルCOEプログラムのもと、文化交渉学教育研究拠点の博士課程院生の実習を兼ねたフィールド調査研究が行われた。

人文社会学研究において、フィールド研究の重要性が叫ばれて久しい。一部の人文・社会学研究（文化人類学、考古学、地理学）においては、各専門に深化したフィールド研究は行われており、そのための実習教育も行われている。しかし、分野横断的フィールド調査というものは、大学や研究者間の連携に根ざすところが大きく、大きなプロジェクト研究でしか実施できないのが実情である。さらに、その実際を学べる実習調査となるとなかなか存在しない。

ところで、近年進展が著しい日本のベトナム研究は、他の東・東南アジアに比べてやや違う発展経過をみせてきた。戦後から1987年のドイモイ政策開始以前においては、ベトナムでの実地研究が行えない状況にあったため、主として文献からの研究が主体であった。漢字文化圏であったベトナムは、東洋史や東洋学の延長で行える研究分野も多く、山本達郎氏をはじめ日本人研究者がなし遂げた業績も数多い。しかし、1987年のドイモイ開始後、外国人に調査や資料収集の門戸が徐々に開かれ、研究地としてのフロンティアが登場すると、その状況は一変する。当初は研究連携機関や研究者の存在さえ不明な状況で、かつ未開拓分野が多いということもあり、猫も杓子もベトナムへという状況が発生した。こうした一発屋的研究は、その後淘汰されていくわけだが、後になって評価できることの一つに、暗中模索故に各分

野間の情報交換や研究者の連携が比較的活発になったことである。しかも、語学研修などのために長期間の留学が果たせるようになると、ここでも、ベトナム特有の状況が好作用を及ぼす。外人大学生や研究者などを受け入れる大学や機関などハノイ市やホーチミン市にしかなく、しかも外国人が住む所さえ限定されていた状況にあり、留学生や研究者が昆住するつぼの状況が醸成され、そこでさらなる連帯・連携が進んだのである。これは、細分を繰り返していく東南アジア・東アジア研究の中においては非常に特異で、分野横断的な研究・思考を生み出すベクトルへと発展し、やがて多分野連携による調査・研究が企画されるようになっていく。

1994年より開始された桜井由躬雄氏によるナムディン省バッコック（百穀）村の調査は、その成功例の最右翼に位置するもので、歴史学、農学、考古学、社会学、女性学、民族学など様々な分野の研究者が集まり10年以上続いたプロジェクトである。その成果は『百穀通信』（ベトナム村落研究会発行）として、現在まで17号が発行されている。バッコック研究は、特定の研究テーマを共有して始めた調査ではない。従来のベトナム研究において不足していた情報を細かく収集し、そのデータに基づき研究テーマをさらに設定し、包括議論の形成を目指したものである。従って、当初はモノグラフ的に記述的研究やデータ集成を進めるというものであったが、最終的には、データ量の豊かさやその精緻さ、さらには参加分野の豊富さにおいて、他の集落・村落研究を凌駕してしまった。その後、いくつかの重点的研究は、基礎研究から発展して、多分野包括的な議論に展開している。こうした結果、21世紀の集落や集落社会のベトナムあるいは東南アジア研究は、当研究を参照せずには進められない状況が出現した。

また同じ頃、期せずして民族学のほうから、個人研究として参与観察を主体とし、フィールド調査に全面的に依拠したハノイ郊外の集落調査が末成道男氏により進められ、民族誌として『ベトナムの祖先祭祀 潮曲の社会生活』（1998年刊、風郷社）が世に問われている。こちらは、伝統集落の社会構造や祭礼、家族祭祀や親族関係を丹念に記述・調査した民族誌である。その後、多くの民族学（文化人類学）の研究者がベトナムで調査を行っているが、このような丁寧な民族誌の出版は寡聞にして聞かない。

ベトナム史研究と東アジアの民族学における大家が公表したこれらの研究に当初つけられた陰口的批評は、前者に対しては“現代の古文書作り”、後者に関しては“古典的研究”であったと記憶している。そして、その表現が含意する問題は、現在の人文社会学研究（者）が抱える問題点に直結する観が強い。それは、大量のエネルギー投資を必要とする基礎的記述的な研究、さらには網羅・包括的な多分野研究に対する、冷ややかな視線とでも言い換えられようか。

2. フィールド研究や多分野研究の意味

ここで、フィールド研究あるいは多分野研究の意義というものを振り返ってみたい。

まず、フィールドワークとは、なにを目指すべき学問的方法論なのであろうか？例えば、民族学（あるいは文化人類学）では、参与調査による社会や人間の諸活動の観察・記述が一つの基本となっているし、考古学の場合は、その土地の過去の人間諸活動の痕跡を発掘や分布調査から明らかにすることである。地理学の場合は、特定の空間における地理的情報を実地収集することであらうか。ここでお気づきのことと思うが、フィールド研究は、極めて“土地”や“場所”に立脚した研究法なのである。その土地

の社会や人間集団を理解するためには、その場でその人達と“時間”や“空間”を共にするのが最善かつ最短の理解方法なのである。

それでは、文学や哲学といった、文献からの研究や思索を基本とする諸学にはフィールド研究は無縁のものであろうか？そんなことはない。文学作品にしても哲学的議論にしても、人間が編み出したものは全て、その生まれ出た“地域”や“場所”が存在し、その地域や場所が作品・思考に及ぼした影響というものはあるはずである。それらを読み取るには、どうすればいいかと考えたときにフィールド研究の重要性が浮上してくる。

ところで、同じ風景を題材にして絵を描いても、水彩画、油絵、鉛筆画では違った絵になるし、それぞれの画家の流儀やセンスで全く違った絵になる。多分野研究の意義はまさにそこにあり、それぞれの専門から描いた“絵”が、他人の“絵”とどれだけ違うのかを知ることが、研究の第1段階となる。たとえば、自分にとっては美しい妻が、他人には美しいと見える保証はないというわけである。

そして、その美の認識差をもたらしたものは何かと、他人と自分の間で考え、明らかにするのが多分野研究の最終目標である。これは、まさに研究や思考の異種格闘技ともいえるもので、相手の決め技（研究方法や思考の枠組み）を理解しつつ、自分の決め技をかけていかねばならず、簡単なバトルではない。往々にして試合が流れてしまうことも多い。しかし、これをやらねば、従来の研究・思考の枠組みにはまったことしか出てこないのである。これは21世紀の人文社会研究の大きな課題でもある。また、その新しい研究や思考抽出のためには、独自の視点や方法で一次資料を収集し、分析を加えないといけないことも申し添えておく。

幸い当拠点に集ったメンバーは、国籍（日本、中国、台湾、ベトナム）も専門（歴史、地理、文化人類、考古、思想、文学など）も様々であったので、その多様性でもって集落を調査することから見えてくるものがあると考えた。しかも、中国の周縁で、ベトナム、中国、チャンパ、さらには植民地時代のフランスといった文化がまじった中部ベトナム、特に伝統王朝が長期間存在したフエ地域は、我々が目指す文化交渉学の実践研究の場としてふさわしいと考えた。ただ、ベトナム研究の長い著者にとっても、中部ベトナムやフエでの研究経験は極めて浅く、成果を出すことに自信は持てなかった。ただし、いろいろな分野の研究者が集って研究するなら、きっと、そこに活路は見いだせるであろうと判断し、フエ地域を調査地として選定した。

最終的には、関西大学の従来からの学術資産というべき中国研究の成果も活用することも念頭にして、フエ地域の中でも、中国系移民の住む明郷集落やその周辺を調査に選ぶに到ったわけである。

3. フエとフォンヴィン社調査の枠組み

さて、フエ調査の枠組みについて述べておく。

ベトナム最後の封建王朝・阮朝の都フエは、中部ベトナムの北部の砂丘性海岸から、ややおくまったフォン河の脇に鎮座している。そのプランを一見すれば思いつく方も多いと思うが函館の五稜郭に少し似ている。これは近代フランスなどの城郭建築技術を導入しているからであり、阮朝の力の背景を部分的に物語っている。もちろん禁城、皇城、午門などを設けた都城思想の根本は北京の都城に依拠してい

る。現在のフェとその周辺は広南阮氏時代の17世紀末から、西山朝、阮朝にかけてベトナムの政治中心地となっており、その時代はまさにベトナムが南接するチャンパなどを呑み込んで、現在のベトナムの領域を形成する時代に相当する（本紀要のファン・タイン・ハイ論文参照）。とかく、ハノイやサイゴン（ホーチミン市の旧名）といった現在の政治・経済の中心地から研究を出発すると忘れがちなことであるが、当時のベトナムの都は決して、最大級の都市に置かれたわけではないことを覚えておく必要がある。

そして、その北郊に位置する行政区画がフオンヴィン社で、その中にThanh Hà（旧名：清河）、ミンフオン（明香）、ディアリン（地霊）、バオヴィン（褒栄）という集落（村）が、フオン川左岸上に北から南へ連なり、川沿いに道路が縦走し、その両脇を中心に家が建てられている。この地域が17世紀から20世紀前半にかけて、外港として栄えた商業地域（本紀要：ドーヴァン論文、西村論文参照）であったことが、現在のタインハーやミンフオンの街並みからはできず、天后廟や関帝廟の存在に気づかぬば、ここが中国系移民の集落であることさえ知らずに、通り過ぎてしまうだろう。

しかし、よく家並みを観察すると、ミンフオンは川沿いに一族の祠堂を交えて家々を連ね、屋敷地も立派な基礎造成を行っている場合が多い。しかし隣接するタインハーは、建物や屋敷地の造成共に、ミンフオンに劣り、しかも、かなりの家族が集落から去っており、その経済的優劣を見ることができる。また、ディアリンは、煉瓦焼成、土器作り、螺鈿細工、左官などいろいろな手工業を行っており、集落全体としての活気を感じさせる。さらに、バオヴィンは往時の商港時から連続する商区としての雰囲気、を古式の民家に残している。

ここで、西村が2007年10月に、さらに野間と西村が2008年5月にパイロットサーヴェイを行った後、調査分野や調査地の具体的選定し、フェ科学大学歴史学部との共同で調査を行うことに決定した。調査分野は文献資料の収集と調査、地理的情報の収集と調査、民族学的聞き取り調査、物質文化資料の収集と研究などに重点を置いた。

調査実習は、2008年度は、8月の下旬から9月の中旬にかけて野間晴雄（本学拠点教授）とグエン・クアン・チュン・ティエン（Nguyễn Quang Trung Tiên：フェ科学大学歴史学部長）と筆者の指導の下、地理班（班長：野間晴雄）、文献班（班長：岡本弘道）、聞き取り調査班（班長：黄蘊）、物質文化調査班（班長：篠原啓方）の構成で行った。上記以外の調査参加メンバーは、松浦章、原田正俊、熊野健、吾妻重二、沈国威、佐藤実、于臣、氷野善寛が参加し、大学院生は、王頂居、鄭潔西、三宅美穂、グエン・ティ・ハー・タイン（Nguyễn Thị Hà Thành）、熊野弘子の各氏が参加した。

2009年度は、野間晴雄、熊野健（本学拠点教授）、グエン・クアン・チュン・ティエンと筆者の指導の下、同じく8月の下旬から9月の中旬にかけて1週間程度の調査実習を行い、この間にフェ大学での研究シンポジウムも実行した。上記以外の調査参加メンバーは、松浦章、二階堂善弘、井上充幸、黄蘊、孫青の各氏が参加し、大学院生は、稲垣智恵、海暁芳、川端歩、田中梓都美、董科、馮赫陽、松井真希子、グエン・ティ・ハー・タイン、三宅美穂、鄭英實、伊藤瞳、陳其松の各氏が参加した。

また、実習調査期間の前後には、研究者数名が滞在して、それぞれのテーマでの研究深化を行った。また、2009年4月、2010年3月には補完調査も行った。

調査プロジェクトのなかで、フオンヴィン社以外に、フェ都城東接商業域のChi Lăng通り（嘉会地区）などの実地調査も行い、資料収集なども行った。ただし、今報告では、諸般の事情から、その調査

結果は一部しか報告することができなかった。

3.1 東・東南アジアで最後に成立した伝統封建王朝中心地としての研究可能性

ところで世界史的に俯瞰すると、阮朝は東・東南アジア地域で最後に成立した伝統封建王朝であり、フエはその都となる。世界遺産のフエはワシントンより新しいのか！という皮肉が時々聞こえるが、研究はその状況を逆手にとって行えることを強調したい。

つまり、伝統的封建王朝時代の文化や社会の遺制や、そこに起源する影響が、あらゆる日常生活や物質文化などに垣間見ることができるのである。これは王朝が1945年まで存続したこと、さらには1975年まで当地域がサイゴン政権下にあったことなどから、所謂“伝統的”文化や制度がよく残されてきたからであろう。

例えば、封建王朝時代の伝統的土地分配、所有、管理制度は1945年以後も旧サイゴン政権下で継承されていたし、現在もフエで行われる葬礼（図1）は、非常に伝統色の色濃いものである。また、フエ京城内のMai Thúc Loan通りには、1885年フランス侵攻時のフエ陥落（“失守京都 [Thất thủ kinh đô]” と呼ばれる）による死者を祀る陰魂廟（図2、図3）があるが、これなど19世紀末に創建されたものである。おそらくフエと周辺では、過去から続いてきた様々な文化現象を、現代にのぞき見するようなことが、まだまだ多く存在している。

こうした状況から、フエでは“有職故実”的研究が盛んと陰口が叩かれるほど、フエの過去に関する研究は、ベトナム研究においてはかなりの到達点に達しているといってもよい。ただし、視点や調査対象を変えると、未着手の研究や研究不足のテーマがまだまだあるというのが今回の研究で判明した。ただ、未研究のものが多いため、フエ研究の意義を強調するだけではない。

フエ研究の面白さの1つは、封建王朝時代の遺制なども含めて、広南阮氏政権、西山朝、阮朝と続いた政治中心地としての歴史が、その後のフエ、さらにはベトナムにどのような影響を及ぼしたかと考える格好の機会を提供していることである。これは文化交渉学教育研究拠点形成をめざす“文化交渉学”においても、重要なテーマであると思う。とかく、過去の文化交渉、あるいは現代の文化交渉に焦点を



図1 Đội Âm Công による野辺送りータインチュン村



図2 Mai Thúc Loan 通りの陰魂廟



図3 Mai Thúc Loan 通りの陰魂廟2

あてがちななか、過去の様々な制度・精神や物質文化・歴史事象から現在への“影響”も文化交渉の大きなテーマであろう。単に過去から伝わった“古都”の文化としての研究だけではなく、伝統王朝体制の権力中心地がもたらした磁力（文化的、社会的、思想的指向性）が、伝統王朝消滅後も現在にまで及ばせた影響として考えたならば、そのテーマは、現在の東・東南アジアの様々な研究テーマに結びついていくことが理解できる。そして、広く見渡せば、日本の京都、ジャワのジョグジャカルタ、古くはカンボジアのアンコール、タイのアユタヤ、中国の南京や開封などの“古都学”としての研究可能性が控えていることに気づく。

3.2 包括的な資料収集と新出資料

フォンヴィン社での諸資料収集は、亭や寺の勅封状、家譜、墓誌や墓碑、廟の祭文、フランス時代の地簿資料などに及んだ（本紀要の井上、岡本、グエン・ハー・タイン各論文参照）。家譜を血族のよりどころと考えるベトナムでは、一族の祖先を祀る祠堂とともに大事にされてきた。今回の調査では阮朝期に編纂された家譜や1990年代以降にベトナム語表記で再編された家譜が中心となった。10代前後に軽く遡る記述の中には、単に家系構成のみならず、本貫地、埋葬地、得た官位などが含まれていることがあり、100-300年以上遡る記述は、一族の移住の歴史だけでなく、地域の歴史を知る重要な資料となる。また、何らかの理由で家譜を作れない人たちや、あるいは家譜を見ることのできない人たちが作った一族の家系図や名簿のようなものもあり、家譜観念に関するヴァリエーションを理解することができる。

ディアリンでは、ディン（亭：村の共同集会所）を管理する古老会の人たちが、村の神に阮朝朝廷が神位を公認するために与えた勅封状やフランス時代の地簿資料を見せてくれた（図4）。勅封状はディンの祭壇の神位の位牌の前などに専用の箱（図5）に入れ厳格に保管されていることが多く、おいそれとみられるものではない。日を決めて、供物を準備し、ディンの開耕神に請願してから、ご開帳してもらった。フェ周辺集落では、多くの伝統文書が残されている場合が多い。その保管量は相当数に上ると推測されるが、保存の背景には、阮朝あるいはそれ以前からの村の古老達による厳格な維持管理があることを忘れてはならない。家譜にしても現在でこそ、他人に見せてくれる一族もあるが、以前は一族の祖先祭祀の拠り所であり、門外不出であったと聞く。



図4 ディアリンのディンで祭礼後に保管資料などを見せて頂く



図5 ディアリンの勅封状保管箱

地簿資料は、ベトナム歴代王朝が給田制を行うために作ってきた地籍に関する基本情報である。地片の位置や名称、面積、所有者、土地利用形態、農地としての等級などが書かれている。今回収集したフランス植民地時代（1930年代）以降の地簿資料は、地簿と地籍図が揃っており、地片単位の具体的同定が可能である。これと現在の土地利用を比較することにより、その間の土地利用の変化を読み取ることができる（本紀要：グエン・ハー・タイン論文参照）。

3.3 現在の信仰や儀礼生活

まず、明郷人の伝統的年中行事（表）を見ていただきたい。

月日（陰暦）	村の年中行事	場所
1月16日	年頭の祈安	天后宮
1月17日	婦人会が組織する女性のためのまつり	天后宮
2月2日	万昌福德神へのまつり	天后宮
3月23日	媽祖の誕生祭	天后宮
6月10日	五行神をまつる	五行廟
7月16日	前賢をまつる	天后宮
10月30日	陳踐誠の命日	陳踐誠の廟
11月22日	陳踐誠の誕生日	陳踐誠の廟
12月16日	無主墓にお供えをして祀る	墓地
	ある家庭での年中行事	
1月1日	元旦の家庭儀礼、昼は天后宮へ行く	家庭・天后宮
1月1日～15日	天后宮に行き家族の求安を行う	天后宮
1月3日	祖先を他界へ送る	家庭
1月9日	60歳以下の既婚婦人が健康を祈って行う	家庭
4月11日	母方の祖先命日	母の実家
5月5日	端午節	家庭
5月23日	1885年フランス侵攻時のフエ陥落（失守京都）による死者を祀る儀礼	家の前の通りなど
6月24日	祖先の命日	父の出身地
1月15日	上元節	家庭

7月15日	中秋節	家庭
8月2日	自分が住む土地へのお供え	家庭
10月26日	入田儀礼	神農庵
12月23日	清明礼（カマド神を祀る）	家庭
12月30日	祖先を家の宴に招く	家庭
12月30日夜	除夜儀礼	家庭

村の年中行事が天后宮を中心として、組織されていることがわかる（天后宮をめぐる信仰活動は、本紀要の末成論文、黄論文、黄・熊野他報告、西村・篠原他報告を参照）。また、清明節など中国起源の年中行事も多い一方、村の中興人物である陳踐誠、フランス侵略による都陥落時の死者や居住地へのおまつりなど独特のものも含まれている。この他に、陰暦で半月ごとの寺廟へのお参りもある。この年中行事の数に関して、参加院生などから『年中祭礼をやっているのか?』などと驚きの声が聞かれた。しかし日本であれ、中国であれもともと伝統的な生活に組み込んでいた生活習慣を、現代化の過程によって捨ててきたから“多い”と言えるのであり、これが5-60年前であれば日本や中国も似たような年中行事の密度だったのではないだろうか？前現代から現代にかけての我々の生活変化がいかに大きいかということを示している。現代化の著しい21世紀において、我々の社会が近い過去にどのような生活文化を築いていたかをできるだけ正確に理解しようとしなければ、現代も過去の社会も正確な理解はできないと痛感した。

明郷が集落のランドマーク的存在として集落の両端に立てた天后宮（媽祖廟）と関帝廟の歴史の変遷も興味深い。聞き取り調査では、天后宮は現在でも明郷人や華人系住民に信仰が厚く、中国系宗教寺院としての性格が色濃い一方、関帝廟は、中国系住民の信仰対象のみではなく、地元ディアリン村の寺廟としての性格も色濃いことが判明した（本紀要、野間・西村・他論文参照）。ただし、両寺廟とも1947年頃に焼失し、1950年代末から1960年代初頭にかけて、フェ都城郊外の各華僑会館から重修・再建のための資金寄付を受けている。従って、関帝廟を単純に地元集落としての寺廟として理解するのも早計のようだ。おそらく、中国系宗教施設と地元集落の宗教施設としての二重性を考えなくてはならないのだろう。

またタインハーのキン族には、阮朝期に科挙に合格して高級官僚となり、フェ都城内に宅地を拝領し移住した例があった。その息女がまだご存命で、家族を通じて話を伺った。女性としては当時最先端のフランス式教育を受け、成績優秀で家事なども負担せずに済み、子供達も学者などの知識人としての人生を歩むことができたようだ。家族としては、宗教は迷信として無信仰の方針だったらしい。ところが、高齢になって娘が病にかかったときに、自分の故郷の天后宮にお参りしたら御利益があって、健康を取り戻すことができ、それから天后宮へお参りするようになったという伝統回帰の現象があった。

ディアリンの場合、村を開いた始祖を開耕神として厳格にまつり、その墓も立派に守られている（本紀要：篠原論文・報告参照）。

3.4 多様なネットワーク

聞き取り調査は、ミンフォンに残る明郷人やバオヴィンやディアリンでの華僑、タインハーでのキン族が中心となった（本紀要の黄・熊野報告、黄論文、木村論文、三宅他報告を参照）。キン族の場合、タ

インホア省など北部南端から中部北域のクアンチ省にかけての地域から入植してきた人が多い。ただ、北から南へという伝統的南進に沿った移住のみでなく、交易港であったホイアン（フエから南約110km）からタインハーに移住してきた人もいる。タインハーあるいは明郷は、交易港として栄えていた18世紀までは行政的にはホイアンに属していたとされるが、その後も人的ネットワークが存続していたのだろう。

明郷の場合、明末から清初にかけての福建人を中心とした中国人移住者が形成した集落と理解されている。天后宮や関帝廟には、広東・仏山製の乾隆45年（1780年）銘の鉄香炉や雍正元年（1723年）の青花香炉などの注文生産品が残っており、往時の活発な商業ネットワークを示している。また、現在の華人系住民のなかには海南島や広東から2～4世代ほど前に移住してきた人たちもいる。華人系住民のネットワークに基づき、移民が頻繁に行われていたことを示している。興味深いのは、華人系住民男性とベトナム人女性が家族を持った場合、家族を残して男性が帰国したり、子供を半分残して半分連れて帰ったケースがあった。人的ネットワークの形成基礎にもなっているはずだ。

また、タインハーやディアリンにも華人系住民が住んでいるし、聞き取りではキン族の家系の中にも華人系住民と結婚した例が決して少なくないことがわかってきた。タインハーとミンフオンを比較すると前者の集落外観はみすぼらしく、はっきりした経済優劣がある。現在はミンタインとして両者は行政単位的にはまとめられているが、住民意識にはかなりの溝がある。しかし、それでも先述のタインハー出身高級官僚の一族ではミンフオンの女性をもらっているような場合もある。住民の集団帰属意識あるいはネットワークというものは、婚姻や移住あるいはその他の原因により、その壁が乗り越えられる場合も多いようだ。このあたりは今後の文化交渉学研究の研究テーマともなりえよう。

先述の天后宮は1947年の破壊時に、尊像をチーラン通りの海南会館に移し、さらにやや離れた関聖寺に移して一時避難を行っている。これも華人系あるいは華人系宗教のネットワークによるものなのだろう。

一方、ディアリンでは、左官、木工関係業、煉瓦や土器作りなどの生産業が盛んだが、左官業は阮朝のフエ都城建設時に活躍した左官達が朝廷より土地を拝領し、住み着いたことが起源とされる。現在でも省内の左官業者が左官の神を祀る廟で、毎年祭礼を行っている。また単に省内での活動だけでなく、ホーチミン市に移住している人もある。そして、このディアリンにも華人系住民が住んで煉瓦窯を経営していた。また、かつて盛んであった螺鈿細工業はクアンナムやクアンガイなどの、中部の南から来た人たちが注文をしていたといい、中部ベトナムに広く販路を持っていた可能性があるが、これも隣のバオヴィンの港に依拠した商業活動とディアリンの生産活動が結びついたケースと言っているのではないだろうか。バオヴィンでは、1975年以前、華人系住民を含む多くの商人が、中部各地と活発な商取引を行っていた。

3.5 研究の連携と拡がりを目指して

フォンヴィン社調査を始めるにあたって、北郊のタインフオック（旧：清福社）を中心に当地域での人類学的調査に専念されている末成道男先生に相談したところ、当地域での調査にこころよく賛成して下さった。末成先生には、フォンヴィン社域での調査も行われており、その研究の一部についても本紀

要で報告して頂き、短期間の参与あるいは聞き取り研究しかできなかった我々の調査団の研究に対して、厚みのある人類学的研究（本紀要：末成各論文参照）を加えて頂くことができたのは非常な幸運であった。

また、集落研究あるいは歴史地理研究として、調査域の時間軸での認識を深めるため、フォンヴィン社の北西近接域に位置する Hoá Châu（化州）城の考古学調査を、西村の科研費で2009年度から2011年度にかけて行っている。この調査により、16-17世紀以前の当地域の歴史・文化状況と、乏しい文献資料以外から理解する糸口が得られるようになってきた（本紀要：西村ホアチャウ城論文参照）。

そして、2009年9月4、5日には、フェ科学大学において『フェの歴史と文化：周辺集落と外部からの視点』というタイトルで、国際シンポジウムを行い、フェの研究者と日本の研究者を中心に、フォンヴィン社での調査報告を交えつつ、フェの歴史、宗教、集落、建築、考古学に関する研究報告を行い、その結果は2010年3月に、グエンクアンチュンティエン、西村昌也（編著）：『Văn hóa và lịch sử Huế: qua góc nhìn làng xã phụ cận và quan hệ với bên ngoài』（フェの文化と歴史：周辺集落と外部からの視点：Thuận Hoá 出版社）として出版した。

さらに、2011年7月10、11日に、関西大学文化交渉学教育拠点において、『ベトナム・フェ研究最前線——周辺集落研究からの視点——』を開催し、前半は「フェ伝統地方文書群の世界」とし、トヨタ財団助成「フェ都城周辺集落の伝統民間文書保存収集」プロジェクトで行っていたフェ伝統地方文書群収集・研究に関して報告し、後半は「フェ都城旧外港集落の調査研究：文化交渉学としてのフィールド研究をめざして」として、フォンヴィン社の旧外港集落と周辺に関して、文化人類学、地理学、歴史学、歴史地理学的研究の報告を行った。これにより、日本においてもベトナム、あるいは東・東南アジア研究におけるフェ研究の面白さや重要性を紹介することができた。本紀要に掲載した各論文、研究ノート、資料報告はこうした各会議での報告と、調査団メンバーによるフォンヴィン社と周辺での調査報告から構成されている。

こうした諸々の研究活動や調査の結果、本紀要は、日本のフェ研究において比較的話題になりやすい世界遺産関係の都城遺跡や古建築以外の分野に関して、まとまりのある研究書となったと思う。

ただし、本研究の弱点として述べておかねばならないこともある。それは、フェ研究あるいはベトナム前近代史研究者の最前線での研究参画が不可能であったため、阮朝期の正史関連資料『大南会典事例』、『大南寔録』、『大南一統志』の幅広い活用が行えなかったこと、阮朝史全般に関する基礎的知識を欠きながらの研究を進行させてきたことが挙げられる。これらの欠点に関しては、後続するベトナム前近代史研究の専門家などにより適宜修正、補完されることを願う。

それから本紀要以外にも、篠原啓方氏と岡本弘道氏と筆者の共同で進めてきた通称“三国比較研究”シリーズの中で、以下の研究論文を公表することができた。

ファン・タイン・ハイによる“フェ・阮朝期の皇族の陵墓について”とグエン・クアン・チュン・ティエンによる“フェにおける葬礼への宮廷文化・仏教・儒教の影響”（篠原啓方編『周縁の文化交渉学シリーズ3 陵墓からみた東アジア諸国の位相—朝鮮王陵とその周縁—』所収）、チャン・ドゥック・アイン・ソンによる“阮朝期ベトナム（1802～1883年段階）の造船業と船舶”（岡本弘道編『周縁の文化交渉学シリーズ5 船の文化から見た東アジア諸国の位相』所収）、西村昌也による“ベトナム形成史にお

ける“南”からの視点：考古学・古代学からみた中部ベトナム（チャンパ）と北部南域（タインホア・ゲアン地方）の役割”（篠原啓方編『周縁の文化交渉学シリーズ6 周縁と中心の概念で読み解く東アジアの越・韓・琉——歴史学・考古学研究からの視座』所収）

フエ地域や隣接域の歴史・文化研究が公表されているので、是非併読していただければ、フエ地域に関するより重層的・立体的理解が進むのではないかと思う。また、本研究を中心に、文化交渉学教育研究拠点でグエン・ティ・ハー・タイン氏が博士論文『Spatial organization of the Hue imperial city and its adjacent commercial centers since the 19th century』（2010年度）を提出したことも、本研究の重要な成果の1つとして、強調しておきたい。

4. おわりに

フィールド研究は、そこで見て聞いて感じて考えることを基本とした決して難しい作業ではない。さらには調査地を基点として時空軸上での比較を行って、いろいろな差異や変化を読み取ることができるものである。21世紀の人文社会学研究の基本的研究方法として根付いて欲しいと心から願う次第である。

さらに、様々な研究潜在性を抱えた中部ベトナムあるいはフエ研究がいつそう進展することを祈るものであるが、もし、本書がその進展に寄与できるのなら本望であるし、フエ研究に関しては全くの素人的レベルから出発して、研究を行ってきた参加者の大半の労苦も報われるのではないかと考える。

最後に、本プロジェクト施行にあたってお世話になった **Huong Vinh** 社のみなさん、フエ科学大学と関西大学の関係者の方々、調査開始にあたってご指導を頂いた末成道男先生、三尾裕子先生、そして、参加者の全ての皆さんに感謝申し上げます。

